

単元シート

単元

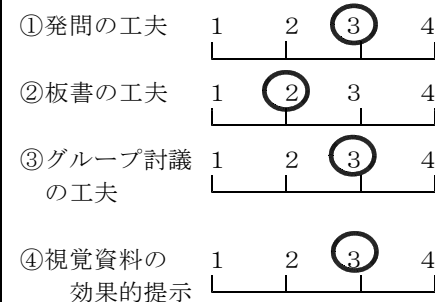
東方の世界帝国

配当時間 (5) 時間

生徒のゴール像

- 唐が「東方の世界帝国」として、政治や経済面、文化面にわたり、圧倒的な力をもっていたことを理解できる。
- 古代ローマがその後の西欧世界に長く影響を与えたのと同様に、唐が東アジア世界の歴史に多大な影響を与えたことに気づく。
- 隋唐に対し、日本が冊封を受けず、独自の地位を保ったことを理解できる。

手だての有効性



次の単元・次年度へ向けての留意点


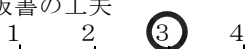

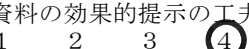
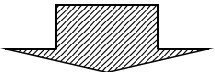
唐が現実の経済的格差を認めた「兩税法」の施行は、中央集権体制にもとづく指導・統制を緩ませることになり、結果的に、江南地方を中心とする経済の繁栄が実現されることになった。これらを背景として、宋および新都としての開封の成立があることに留意する。

生徒の実態
アンケート結果より、生徒は漢文の授業等を通じて、三国時代の、魏（曹操、曹丕）や呉（孫権）、蜀（劉備）等の名称について知っている。 しかし、隋や唐の時代や中学校の既習事項の遺隋使や遣唐使などが遣わされたということに限定される生徒が大半を占めている。

次	南北の対立、南北朝文化	隋唐帝国の時代、唐代の社会他	朝鮮半島と日本、唐の滅亡
目 標	○魏晋南北朝時代が形成された過程を理解させる。 ○南北朝文化の特質について理解させる。	○隋の統一により、新たな中国文化圏が成立したことや大運河建設の意義を理解させる。 ○唐の盛衰について、貞観の治や開元の治などに重点をしぼり、理解させる。	○唐が「東方の世界帝国」といわれるゆえんについて、理解を深めさせる。 ○均田制や府兵制に象徴される平等主義が、経済進展に伴い、崩壊したことを理解させる。
学 習 内 容	①三国時代から五胡十六国時代への過程を理解する。特に、五胡十六国時代において、北方の遊牧・狩猟等の諸民族との交流が中国世界に与えた影響について、理解する。 ②江南地方の開発が既に漢代から始まり、三国時代には呉の存立を可能にさせるほどの経済力であったことを理解する。 ③南北朝の文化の特質について違いを通じて理解を深める。 配当時間 (1) 時間	①隋の成立が中華帝国の再建であり、均田制や府兵制、科挙等の諸制度が唐にも継承されていったことや大運河が江南と華北を結ぶ重要な輸送路となったことを理解する。 ②唐が中央主権の専制国家としての体制を整え、その版図としての勢力範囲も広大な地域にわたることを理解する。 また、国家の統制による、安定であったことに着目させる。 配当時間 (2) 時間	①隋唐帝国の冊封体制が、東アジア全域にわたり国際秩序を形成したことを理解する。 ②隋唐による朝鮮半島支配と日本との関係について理解を深める。 ③安史の乱、黄巢の乱が唐にもたらした影響や背景について考察する。 配当時間 (2) 時間
手 だ て (全 体 ・ A 層 ・ C 層)	○全体に対して、魏晋南北朝時代の流れを図示化することで、形成過程を視覚的に理解できるようにする。 ○A層に対しては九品中正法や均田制等の政策的狙いと効果について、考えさせる。 ○C層には、赤壁の戦い等のエピソードを提示し、魏晋南北朝時代についての興味・関心を高めさせる。また、視覚資料等からわかることを答えさせ、授業への参加意識を高めさせるようにする。	○全体に対し、唐が黄河流域の長安を都とし、そういった意味において秦漢以来の歴史的伝統の上に国が築かれたことに気づかせる。 ○A層には、約300年にもわたり、唐の広大な地域支配を可能ならしめたものについて考えさせる。 ○C層には、則天武后や玄宗と楊貴妃についてのエピソードを紹介し、歴史への興味・関心を高めさせる。	○全体に対して、隋唐が強い政治力や高度な文化・文明のもっていたことを理解させ、「東方の世界帝国」の意味について理解を深めさせる。 ○A層に対し、安史の乱等の背景に経済発展があり、それが唐の平等主義という建前と合致しなくなったことに気づかせる。 ○C層に、白居易の「長恨歌」や杜甫の「春望」を紹介し、興味・関心を高めさせる。

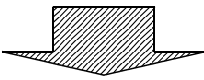
【 授 業 シ ー ト 】

◎授業者 [] ◎実施日・校時 [平成21年10月 日 ()・5校時] ◎授業クラス [2年 組：生徒数 名] ◎実施場所 [地歴公民科教室]

学習の展開 (内容と活動)	授業の手だて・工夫 (指導上の留意点)			授業の振り返り	手だての有効性
	全体	A 層	C 層		
<p>----- [本時の目標 (ねらい)] ----- グループ討議を通し、「東方の世界帝国」としての唐および日本などとの関係について理解を深めさせる。</p> <p>導入 「漢委奴国王 (かんのわのなのこくおう)」の金印の政治的意味について推測する。</p> <p>内容 (ア) 金印や卑弥呼をもとにして、「冊封体制」の意味や、ねらいについて、政治的側面、経済的側面、軍事的側面のそれぞれから、具体的に考察する。</p> <p>「冊封体制」について、位階や返礼品を中国側は、「なぜ」与えたか、また、朝貢側は「何のために」、それらを求めたかについて中国側や日本側のそれぞれの立場に立ち、グループ討議を通じて話し合う。</p> <p>内容 (イ) 「正倉院はシルクロードの終着駅」の言葉の意味、唐と日本の朝貢関係について、それぞれ具体的に考察する。</p> <p>グループ討議を通じて、シルクロード沿いの各地方で生産されたものを分類し、「正倉院はシルクロードの終着駅」の意味について理解を深める。そのため、遣唐使が運んだ物品を整理する。この作業を通じて、唐帝国がまさに「世界」にまたがる「帝国」であることを実感する。そして、唐からわたされた品々と、日本から運んだ品々を比較し、それらの品の技術力の違いについて考察する。 また、隋唐と日本の間で「朝貢」関係はあったが、「冊封」関係がなかった理由についても推測する。</p> <p>まとめ 唐が「東方の世界帝国」であることや、日本が隋唐に対して、独自の立場をとったことなど、本時の授業内容をまとめる。</p>	<p>金印の読み方を考察させ、生徒の興味・関心を高めさせる。</p> <p>他の金印の例をもとにして、冊封の政治的、経済的意味、軍事的意味について具体的に考察させる。</p> <p>既習單元である「地中海世界と西アジア」での知識をふまえ、シルクロードを通じて運ばれた物品について、プリントの写真と地図をもとに推測させる。</p> <p>663年の白村江の戦いについて紹介し、その政治的意味について理解させる。また、894年の菅原道真による、遣唐使の停止の意味についても考察させる。</p>	<p>皇帝と国王の違いについて考察させる。</p> <p>返礼品として受け取った品々の中に、「曆」(カレンダー)があったことを紹介し、年賀状の西暦表記と元号表記をもとに、その意味について考察させる。</p>	<p>「金印」のレプリカを示し、生徒の興味・関心を高めさせる。</p> <p>中学校の既習事項である、徳川幕府と大名の関係から、冊封体制を連想させる。</p> <p>九州国立博物館が開発した「きゅうばっく」をもとに、陸のネットワークとしてのシルクロードを通じて運ばれた物品に対する興味・関心を高めさせる。</p> <p>九州国立博物館開発の「きゅうばっく」の品々をもとに、その使途などについて想像させることで、シルクロードを通じて運ばれた品々に対する興味・関心を高めさせる。</p>	<p>生徒の学習到達度、気づきなどを記入</p> <p>金印のレプリカや、九州国立博物館から借用した教材 (唐と日本の輸出入品のレプリカなど) を用いることで、生徒の興味・関心は高まり、班別のグループ討議においても熱心に討議する姿がみられた。レプリカではあるが、実物を手にとって具体的に考察させることは、生徒の知的好奇心を喚起し、非常に有効な手だてであると考察させる。</p> <p>また、「冊封関係」については、より丁寧な説明が必要であった。やはり、抽象的な思考については、多くの実例を用意し、より具体的に説明する必要がある。</p>	<p>①発問の工夫 </p> <p>②板書の工夫 </p> <p>③グループ討議の工夫 </p> <p>④資料の効果的提示の工夫 </p> <p>[参考] 1 効果がなかった 2 あまり効果がなかった 3 少し効果があった 4 とても効果があった</p> <p></p> <p>次の授業の改善など</p> <p>九州国立博物館開発の「きゅうばっく」の生徒への提示の仕方について、工夫・改善を図る。</p> <p>また、グループ討議についてより論議を深めさせるため、配当時間を1時間増やすことを検討する。</p>

【 授業シート 】

◎授業者 [] ◎実施日・校時 [平成21年10月 日 ()・2校時] ◎授業クラス [2年 組：生徒数 名] ◎実施場所 [地歴公民科教室]

学習の展開 (内容と活動)	授業の手だて・工夫 (指導上の留意点)			授業の振り返り	手だての有効性
	全体	A 層	C 層		
<p>----- [本時の目標 (ねらい)] ----- グループ討議を通して、唐が衰退から滅亡へと至る過程について、政治的側面、経済的側面のそれぞれから考察させる。</p> <p>導入 なぜ、唐は滅亡に至ったかについて、推測する。</p> <p>内容 (ア)均田制や府兵制、租庸調制が崩壊していく過程について、理解する。</p> <p>均田制や府兵制、租庸調制が平等主義の建前にもとづくものである。しかし、「開元の治」、「貞観の治」とよばれる善政をはじめとした経済の発展が、やがて経済の自由な競争と富の偏在をもたらし、このような経済的格差拡大が、一律の平等主義を建前とした均田制や府兵制、租庸調制を崩壊させていったことを理解する。 また、これらの諸制度が表裏一体であったことも、諸制度の崩壊を早める一因となったことに気づく。</p> <p>内容 (イ)安史の乱およびそれがもたらした、政治的・経済的・軍事的影響について、考察する。</p> <p>安史の乱により、節度使が軍閥としての藩鎮となり、租庸調制に代えて両税法を導入せざるを得なかったことを理解する。 また、両税法の導入は、農民を貨幣経済に組み込むものであり、結果として、小農民の没落をまねいたことについて理解を深める。</p> <p>まとめ 唐の滅亡要因について、まとめる。</p>	<p>農業生産力の発展が、商業の発展を促すことを理解させ、ひいては人々の経済的格差をもたらしたことに気づかせる。</p> <p>グループ討議により、唐の滅亡原因について推測させ、仮説を立てさせる。</p> <p>均田制、府兵制、租庸調制が、どのような建前にもとづくものであったかを理解させる。</p> <p>資料より、6年の間に人口が約5分の1に激減していることを読み取らせ、その理由について仮説を立てさせ、グループ討議をさせる。そして、実は人口激減の主因として人口把握が不可能であったため、統計上、人口が激減していることに気づかせる。</p> <p>安史の乱、黄巢の乱が唐にもたらした影響や背景についてグループ討議を通じて考察させる。</p>	<p>均田制、府兵制、租庸調制の内容について、確認する。</p> <p>安史の乱等の背景に経済発展があり、それが 唐の平等主義という建前と合致しなくなったことに気づかせる。</p>	<p>安史の乱を詠んだ、杜甫の「春望」を紹介し、興味・関心を高めさせる。</p> <p>楊貴妃を失った玄宗皇帝の悲しみをうたった白居易の「長恨歌」を紹介し、興味・関心を高めさせる。</p>	<p>生徒の学習到達度、気づきなどを記入</p> <p>「春望」を紹介した場面で生徒達は詩に引き込まれていた。また、資料の読み取りをもとにした唐滅亡の原因についても熱心な話し合いが見られ、今まで発言が少なかったグループにも発言が見られ、発言内容に厚みが見られるようになった。</p> <p>今回の単元を通して、毎回の授業アンケートでは、「普通」と回答した生徒の割合が多かった。しかし、単元全体を通してのアンケート結果では、「友だちとの話し合いは楽しかった」「なぜか、ということについて考えることができた」など、「考察することの楽しさ」を回答した生徒は予想以上に多かった。</p> <p>今後も、グループでの討議活動を続けていきたい。</p>	<p>①発問の工夫 1 2 ③ 4</p> <p>②板書の工夫 1 2 ③ 4</p> <p>③グループ討議の工夫 1 2 ③ 4</p> <p>④資料の効果的提示の工夫 1 2 ③ 4</p> <p>[参考] 1 効果がなかった 2 あまり効果がなかった 3 少し効果があった 4 とても効果があった</p> <p></p> <p>次の授業の改善など</p> <p>「安史の乱」の要因や影響についての、グループ討議に多くの時間を要した。しかし、仮説を立て、その仮説の誤りを発見させることが、生徒の知的好奇心をより高めていくようである。仮説を崩させる、つまり表面的な常識を覆させるような授業をめざし、工夫・改善を図っていきたい。</p>